一気に逆転する日常物語

マーボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一気に逆転する日常物語

【Ｎコード】
Ｎ６３０８Ｚ

【作者名】
マーボー

【あらすじ】
両親は仕事の都合で海外に赴任し、妹と一緒に生活を始めた主人公。兄妹仲良く力を合わせた生活も気がつけば一年が経過していた。順調に日々を過ごし、主人公は高校二年生に進級。妹の琴美も主人公と同じ高校へと進学が決まり、充実した毎日を過ごしていた。しかし、そんな二人の生活はある出来事がきっかけで崩壊してしまう。二人の生活はどうなるのか？　はたまた幸せな暮らしを崩壊させるほどの出来事とは？　ブラコンな妹とそれに苦労する主人公の日常物語！

第一話：始まりはまずプロローグから（前書き）

皆様お久しぶりです。
今回は新規連載でもしようかなぁといった甘い考えと、自分の趣味に突っ走り好きに書きたいという欲望をぶちまけた作品となっています。
更新は不定期ですが、そこは読者様である皆様が温かい目で見守ってくださる事を信じていますよ！
まぁ正直本当に書きたい物を書いているだけなんで……どうなるんだろう？　きっとすぐに消した方がいいのかな？　段々と不安になってきましたが、それは皆様のお声によってという事で！

ではここで簡単な兄妹設定を紹介したいと思います。

主人公設定
名：神崎（かんざき）　京一（きょういち）
年齢：高校二年生
職業：学生
容姿：身長は平均よりも少し高め。髪は目にかかるか、かからないかぐらい。
性格：基本的に面倒見がいい。妹と二人で過ごしてきた約一年間は家事全般を担当してきた。
　しかしそんな彼もブラコン発動中の妹には容赦なくツッコム場面もあり、気苦労が絶えない。
特技：家事全般（一定水準以上はこなる技量あり）
一言：「嫌な言い方するな！　一瞬想像しちまったじゃねぇか！！」

妹
名：神崎（かんざき）　琴美（ことみ）

年齢：高校一年生になります。
職業：学生
容姿：背はわりと小さめ。周りの女性と比べても比較的に小さいが、そこがまた可愛いと評判。
　髪型はサイドポニーで落ち着いた雰囲気を出しているが、性格は……。
性格：典型的な元気ッ娘。常にブラコンをオープンにしている。明るくノリがいいためマスコット的な存在。
特技：お兄ちゃんの事なら何でも分る（自称）
一言：「ある偉大な人が言ってた。シスコンは文化だ！　だから恥じゃないんだよ、お兄ちゃん！」

といった感じになっています。
まぁまたキャラは増えるので、改めてキャラ紹介の場を設けさせて頂きます。

では『一気に逆転する日常物語』、ゆっくりまったりとはじまります！

第一話：始まりはまずプロローグから

「夢じゃなかったのか……」

目を開けて、真っ先に飛び込んできたのは、見知らぬ天井。
いつもと違う光景が飛び込んできた事に一瞬の戸惑いが生まれるが、すぐに先日の記憶を呼び出し、そのすべてを解決させる。

「はぁ、俺には場違いな場所だよなぁ。……琴美もきっと驚いているだろうなぁ」

思い出すのは、今まで俺と二人だけで過ごしてきた一人の妹の顔。
そばにいるのが兄である俺だけだった為か、琴美は甘えん坊……いや、かなりのブラコンに育ってしまった。
え？　それは俺の責任だって？　んなわけない！

「いやでも、アイツだってもう１６歳。高校一年生だ」

昨日までは中学生だった琴美も、今日からは一歩大人の階段を上ったんだ。
兄離れした琴美の姿をきっと拝めるだろう。

「京一様、朝でございます。起きてくださいませ」

コンコンと控えめなノックと同時に、俺を起こす為の声が届いてくる。
これも前までの生活からは考えられない事で、『この家』に来てからの新しい出来事。

さっきも少しだけ漏らしたと思うが、前の家では琴美と俺の二人だけの暮らしだった。
両親は二人揃って海外で仕事のため赴任中。
普通なら俺達も一緒に海外に行くはずだったが、俺が高校に進学するにあたって、「もう京一にまかせて大丈夫よね？」と母さんの一声で日本に残る事に。
しかも、両親はオレが高校に上がる年の冬休みから既に海外に赴任。
最初の二人だけで過ごした正月は……うん。寂しかったなぁ……。

「京一様、京一様～？」

とそこで、俺の思案を遮るように、再び声が室内に響いてくる。

「はーい。起きてますよ～」

寝ている間に固まってしまった体を解す様に、伸びをしながら返事をする。
その声を聞いた、俺の事を起してくれた人は、朝食の有無を伝えると部屋の扉から離れる。

「さて、今日から新生活なんだし、張り切っていこうか！」

気分を一新、俺は新たな『この生活』を受け入れるために、まずは、朝食を食べに向かった。

第一話：始まりはまずプロローグから（後書き）

始まりました！

プロローグですが、まだまだ続きます。

しかも長いです。

では、次話もよろしくお願いします。

第二話：その次もプロローグから（前書き）

続いて第二話の投稿です！

第二話：その次もプロローグから

「あ、お早うございます、京一様。昨晩は眠れましたか？」

俺がリビング……いや、天井からシャンデリアが吊下がっている無駄に大きい室内に顔を出すと、さっき起しに来てくれた声の主が俺の事を向かいいれてくれた。

「お早うございます。眠れる事は眠れたんですけどね。起きた時は自分の部屋じゃなかった事に驚きましたよ」

「ふふっ。でも、慣れてくださいね？」

鈴がコロコロと転がるような甘い声に、俺の鼓動は緊張からか、速くなっていく。

彼女の名前は日下部（くさかべ）　陽菜（ひな）。

歳は俺と同い年で高校二年生らしい。

綺麗なエメラルド色の髪を片方だけ可愛い花飾りで止めていて、明るい性格をしている我が家のメイドさんだ。

俺の祖父、神崎（かんざき）　源二（げんじ）は世界でも有名な神崎ブランドの創設者。

商品は女性を対象とした服や下着などの衣服類。

そんな祖父の家に預けられた俺と妹の琴美。

あれ？　二人暮らしは？　と思うかもだけど……まぁこれに関しても色々あったんだ。

◇◆◇◆◇◆◇

【回想】

「琴美、そんなにくっついてくるなよ」
「え～？　いいじゃんいいじゃん！　私たちは兄妹なんだよ？」
「だからくっつくなって言っているんだ。そもそもここは人が往来する道なんだぞ」
「ふっふ～。いいんだよ～？　そんなに恥ずかしがらなくても。なんたって私たちは兄妹！　シスコンは胸を張っていい事なんだから！　だからこうやってくっついてたって平気！　むしろ当然なんだよ！」
「俺は平気じゃないし、当然でも何でもない。ついでに言うと俺はシスコンじゃない」

それでも俺の腕に引っ付いてくる琴美を無理やり引きはがしながら、俺たちは晩ご飯の食材を買いに商店街へと向かっていた。

「あ、その前に銀行に寄らないと……」
「今日はお母さん達から仕送りが来る日だもんね。今思えば、こうしてお兄ちゃんとラブラブな毎日を過ごせるのはお母さんとお父さんのおかげだよ！　もうこのまま帰ってこなくてもいいかも♪」
「お前最低だな。しかもラブラブな毎日って何だよ」

頭の中が若干……いや、かなり崩壊してしまっている妹に肩を落とす。
そんな俺の様子にも気がついていない我が妹は、

「はぅん！　お兄ちゃんお兄ちゃん！　私たちって今どんな風に見えているんだろうね！　恋人かな？　夫婦かな？　または援助交際！？　私はお兄ちゃんとならそれでもいいよぉ！」
「……」

本当に頭が残念な妹だ。
だけど、こんなんでも俺の妹。
面倒は見てやらねば……。

「はいはい。無駄口はいいからさ。ちょっとお金を卸してくるまでここで待ってて」

季節は冬。
ヒューヒューと木枯らしが吹く寒空の下、俺は妹を銀行前に放置して一人だけ中に入っていく。
あ、中は暖房が効いてて暖かい。
外と違って暖かい室内は心が落ち着く。
あー今日はもうここにずっといようかなぁ。

「って、ちょっと待ったぁぁぁっっ！！！！」
「あ？　何だよ。銀行の中は静かにしないと駄目じゃないか。ほらみろ、周りが俺たちに注目している。すいませんね、ウチの妹が」
「え？　あ、ごめんなさい」

俺が謝っている態度に感化したのか、反省の色を示す琴美。
そうそう。俺がちゃんと琴美の面倒を見て教育をしていかないと、将来はお嫁のもらい手が本気でいなくなるからな。

「って、これも違うよ！　いやうるさかったのは本当にごめんなさいだけど、違うよ！」

琴美が俺の側にやってくると、顔を近づけながら小声で反論してくる。

「お兄ちゃん、さっき銀行に入る前と今、私の面倒を見るって誓ったばかりじゃん！　それなのに何でいきなり私を寒空に放置！？」
「何当たり前のように人の心を読んでいるんだ。そんな不気味な人、俺は嫌だな」
「お兄ちゃん！　私もそう思うよ！　まったく、近頃の若い者は」
琴美が腕を組んで年寄りのように憤慨してみせる。
俺の言動に体裁を保とうとしているその様子に、心の中で「若い者って……お前だってそうだろ」とツッコミを入れ、早くお金を卸そうと、ＡＴＮに足を向けた、矢先だった。

「またもや待ってよ、お兄ちゃん！」
「いい加減なんだよお前は？」
「私はね、もらい手がいなくても困らないよ？　だってお兄ちゃんがいるからっ！！」
「今まさにその最有力候補である俺は消えたぞー」
「……あっ……」

さっき俺が言った、人の心を読む人は不気味という発言を忘れてしまったらしい琴美。
両手を上に上げ、ガッツポーズのまま、俺の言葉にその場で固まった。
俺は今度こそ琴美をその場に放置してお金を卸しにいく。

「はぁ。何でお金を卸すだけでこんなに体力を使うんだ……」
でもこれも、あの妹を毎日相手にしていると慣れてくるもので、受け流せているという事は少しは耐性が付いてきたのかもしれない。
「さて、いくら卸そうかなぁ……って、あれ？」

暗証番号を入力し、まずは残高をチェック。
だけども、そこに表記されていた数字は最後に卸した時とまったく変わっていなかった。

「お、おかしいな。母さん達、まだ振り込んでいないのかな？」

仕送りの日には必ず振り込んでいてくれる生活費。
けれど、まぁたまには一日ぐらいズレてしまう事もあるか。
それだけ仕事が詰まっていて、俺たちには申し訳ないと思いつつも、一生懸命に二人で仕事に取り組んでいるのかもしれない。
そう考えると、毎月毎月当たり前のように貰っていた生活費の大切さを改めて実感する。

（うん。先月分だってちょっとは残っているし、今日ぐらいは全然賄える）

晩ご飯分だけを卸し、俺は未だ固まっている琴美の元へ戻る。

「ほら。いつまでそうしているんだよ。早く買い物に行くぞ」
「お買い物？　ふふっ、デートの間違いでしょ？」

復活していないのか、テンションは下がったまま、だけども台詞はいつもの琴美。

「どれだけ器用なんだよお前は！？」

そんな妹を引きずりながら、俺たちはまた寒空の下、足を進めていく。

「ふふっ、お兄ちゃん。シスコンはね、文化なんだよ。恥じゃないんだよ」
「だからそれ怖いって！」
まぁ今はちょうど冬休みだし、弁当とかお金を掛けなければ平気なはずだ。

第二話：その次もプロローグから（後書き）

プロローグはまだまだ続きます。

ええ、まだまだです！

それと、あとがきはプロローグが終わるまでは簡潔に済ませますね。

ではでは次回もよろしくお願いします！

第三話：そのまた次もプロローグから（前書き）

早くも三人の方から感想を頂きました！

とっても嬉しいですよ！

他の読んでくださった方もどしどし感想を書いてくださいね！

では、第三話はじまります！

第三話：そのまた次もプロローグから

〜〜三日後〜〜

「どういう事だおい……」
「お兄ちゃんお兄ちゃん！　仕送りがこんなに遅れるのって初めてじゃない？」

リビングで俺と琴美は机を挟み、向かい合った姿勢で家族会議ならぬ、兄妹会議を開いていた。
議題はもちろん、仕送りについてだ。
今日までの約一年間。こんな事は全くなかった。
それなのに、あれから三日。
まだお金に余裕はあるが、何も言ってこない両親達が心配になる。

「はぁぁ。お母さん達、電話にも出てくれないしね〜」
「そ、それだけ忙しいって事だろ。まぁまだ蓄えはあるんだし、琴美は何も心配するな」

取り繕う様な笑顔で琴美を誤魔化しつつ、内心では膨れあがる不安に押しつぶされそうになる。
しかし、ここで俺が取り乱せば、琴美まで不安な感情を持ってしまう。
いくら普段は馬鹿やっている妹でも、さすがにそこは兄である俺が護ってやらねば。

「もしかしたらこのまま私たちだけになるのかな？　きゃっ。そし

たら私たち、アダムとイヴだよ、お兄ちゃん！」
「母さんと父さんが居なくなっても、全世界にはまだ人類が億越えでいるわ！」

訂正。少しはこの馬鹿にも焦って貰おうか？

「まぁ何にしてもさ。もうしばらく様子を見よう」
「お兄ちゃんの結論ならば！」

その日の兄妹会議は、俺の一声で締めくくられたのだった。
母さん、父さんはきっと仕事が忙しいだけなんだ。
だけど、連絡の一つぐらいくれたって……いいじゃないか。

〜〜一週間後〜〜

「今からあの碌でなし共に電話するぞ？」
「お兄ちゃん、私たちには両親なんて居なかった……だよね？」
「両親？　はっ。そんなのどこのお伽噺だよ。この世に親なんての、本当に存在するのか？　都市伝説だろ」
「そうだよね。今から連絡するのは……この世のゴミだよね♪」

ああそうだ。と言いながら、ここ一週間で何度も押した番号をプッシュ。
ん？　いきなり態度が変わりすぎ？　うるさいわっ！
たしかに最初は忙しいんだろうとか考えていたが、甘っちょろい考えは四日を過ぎた辺りから捨てたんだよ。
普通、何度も何度も息子達が電話しているのに、一回も返さないなんて、さすがにあり得ないだろ！

それとも何か？　あの二人は電話をする暇なんてないぐらいに根詰めているのか？
ってことは、トイレもメシも睡眠も！　あの二人はそれぐらい忙しいのかっ！？

「お兄ちゃん。ちょっと落ち着いて」
「うがーーーっ！！　……ッハ！　あ、ああ悪い」

ふぅ。普段は逆の立場なのにな。
この妹に諭されてしまうなんて……うわ、憂鬱だ。
そう思いながら受話器に耳を当てるも、聞こえてくるのはコール音だけ。
留守電すら設定していない二人の電話は、永遠とこのコール音の繰り返しだ。

「ったく。これから俺たちはどうすればいいんだ？」

親戚の家とかに頼れたらいいんだろうけど、ウチの両親はどうやら駆け落ちしたらしく、今まで祖父や祖母といった親戚関係とは無縁だった。
バイトでもしていれば、まだ少しは今よりも蓄えがあったかもしれないけれど。
中学生だった琴美を一人で留守番させるわけにもいかず、家事全般を引き受けた俺にバイトをする時間は無かった。
それを承知の上で、母さん達は仕送りを多めに送っていてくれたし。
だが、今ではそんな過去にも悔いてしまう。
何よりも早く二人に連絡が付けば……。

「お兄ちゃん……」

琴美が不安げな表情で俺の事を見つめてくる。
瞳には微かに涙が浮かび上がっている表情だ。

「ごめんな琴美。お兄ちゃんがもっとしっかりしていれば……」

そうだ。
俺が家事を理由なんかせずに、寝る時間を削ってでも最低限のバイトをして少しでもお金を確保していれば……。
はぁ。こんな駄目な兄貴で琴美にまで迷惑を掛けるなんて……本当に申し訳ない。
なんて償えば……。

「償い……？　あ、それじゃあ、お兄ちゃん！　私はお兄ちゃんと結婚できれば無問題（モーマンタイ）だよ！　だから早く私と一緒に結婚しよう！」
「……だから人の心を読むなってば」

あーコイツに対しての償いは必要ないかな。
なんかいらん心配をしたよ……。
俺は改めてため息をつこうした。

――その時だった。

手に持っていた電話が鳴ったのだ。

第三話：そのまた次もプロローグから（後書き）

はい。第三話でした～。

えーっとプロローグはまだ続きます。

では感謝コーナーです！

龍賀様、メガネ様、紅　幽鹿様、感想ありがとうございます！

やっぱり感想を頂くと嬉しいですし、書く気がハンパないですね。

だったら早くプロローグを終わらせろ？　……そうですね。

では、次話もまたよろしくお願いします！

第四話：まだまだ続くプロローグ！

俺は反射的に電話を通話ボタンを押す。

「母さん！　アンタ等一体何して――」

他の人からかもしれなにのに、俺の頭の中は両親である二人でいっぱいだったためか、俺は受話器に向かって精一杯の声で怒鳴ってしまった。

『あらあらごめんなさい。少し仕事が忙しくて』

そして受話器から聞こえてきたのは、他の人でなく、聞き慣れた母さんの声。

俺の怒鳴った声にも臆することなく、マイペースな感じで話しかけてくる。

『仕送りの事よね？　本当にごめんなさい。お母さん達も悪いとは思ってたんだけど……でもね。何も貴方たちの事を忘れていたんじゃないのよ？』

「いやいや。それでも電話の一つぐらいさぁ」

このマイペースっぷりに、さっきまでの俺の怒気はすっかりと萎えてしまった。

「それで、仕送りは何時ぐらいになりそうなの？」

気を沈め、冷静になった俺は、静かに母さんに問いかける。

『その事なんだけど……ごめんね。仕送りはもう出来そうにないの』
「はあぁぁあああっっ！！？？　それ、どういう事だよ！？」
母さんの言葉に、冷静になったはずの俺の口からは家を震撼させるほどの声が飛び出る。
「いやお兄ちゃん。さすがにそこまでは――」
俺の心を読んだ琴美がツッコムが今はそれどころじゃない為スルー。運が良かったな、琴美。
『み、耳がキンキンする～……』
受話器の向こうで母さんが弱々しい声で小言を漏すのが聞こえた。
「そ、そんなのはどうだていいんだよ！　それより、どういう事だよ、仕送りが無理って！」
「えぇぇっ！！　そ、そうなの！？」
しまった。
俺の発言で今の問題が琴美にバレてしまった。
『え、えっとね。こっちの仕事で少しトラブっちゃって……それで資金が必要になっちゃって……それでそれで、私たち研究者達が私たちの研究のためにカンパして、それでそれでそれで――』
「あ、ああ悪かったよ。だからテンパらずに要点を抑えてさ――」
『貴方たちの仕送り分はないんです』
「要点は抑えてるけど端折りすぎだろ！？」
この母親……ナメてんのか？

『よ、要は、私たちも貴方たちの仕送り分をカンパしちゃったの。そのカンパはこれからもし続けないと研究は続けられないから、毎月送るはずだった貴方たちへの仕送りは私たちの研究費へとなりました。よって仕送りは不可能に。――これで分ったかな？』

受話器の向こうでも、母さんがにへらといった笑みを浮かべているのが分る。
きっとうまく説明できた自分に浸っているんだろう。
この自意識過剰が。

「そんなので納得できるか。そもそも俺たちと研究、どっちが大切なんだよ？」
『そんなの貴方たちに決まってるわ！』
「でも俺たちの仕送り分を研究費にするんだろ？」
『そうよ。じゃないとそもそも稼げないもん』
「……ちなみにさ、今って何の研究をしているの？」
『世界のカップルが営みに励む時間は平均で何時か多いのか♪』
「それ絶対カンパするほど金いらないよね！？　つか海外まで出向いて何研究してるんだよ！！」
『え～、大事な事よ？　だって将来、貴方たちが恋人を作った時に、間違った時間にそういう行為に及ばないように、母さん達頑張っているんだから！』
「そんなのは俺たちの勝手だ！　そもそも間違った時間って何だよ！？」
『え？　それは――授業中とか？』
「そんな授業中になんてするわけないだろ！！　そのぐらいの常識はもっとるわ！！」
『またまたぁ。母さん達が付き合ってた時なんか、時間なんて関係なく突き合ってたんだから♪』

「人の事言えないじゃないかよっ！！　てめぇらは一体何考えているんだぁぁぁっ！！！」
『う、うぇ～ん！　京一がグレてしまったわぁっ！！』
ゼェゼェと荒い息を吐きながら、母さんが泣いているのを耳にする。
けどもう知るもんか。
今までこんなアホな事を考えている人たちの事を親と呼んでいたなんて……。
本気で目眩がしてきた。
「お、お兄ちゃん……」
琴美が心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。
……そうだな。
琴美の為にも、これからどうするのかを母さん達と決めないと。
場合によっては仕送りが出来ない今、俺たちも海外に行って生活しないといけないかもしれない。
『京一！！　てめぇ実の親になんて口の利き方しやがるっ！！』
そこで、耳から離して持っていた受話器からギャーギャーと野太い声が響いてきた。
この声は……
「あ、お父さんだよ」
琴美が俺から受話器をひったくり、応答する。
「お父さん？　私だよ、琴美だよ～！」
『おぉ！　その声は俺の愛娘、琴美じゃないか！　元気にしてたか

？　お父さんがいなくて寂しくないか？　お兄ちゃんは悪戯してこないか？』

俺とは違って態度をコロっと変える父さん。
様子を見て分るとは思うが、父さんは琴美には甘いのだ。
それはもう親バカを超越し、駄々甘なほどに……。

「え、別に元気だし寂しくないし、最近の悩みはお兄ちゃんが悪戯してこない事だけど？」
『ぐっはぁ！　さ、寂しくないのか、愛娘よぉっ！！』

琴美はそんな父さんにしれっと返答し、父さんに致命傷を与えていた。
たぶん吐血ぐらいしているんじゃないかな？

「それで、どういう事なの？　仕送りが出来ないって」
『ぐっ……じ、実はな……くっ、京一に代わりなさい』
「え～、お父さんは私には何もお話ししてくれないの？」
『ぐぬぬ……きょ、京一！！』

そらそうだ。
実の愛する娘に、「カップルがエッチする時間で一番多いのは何時なのかを研究するために、お前達の仕送り分を研究費に注ぎ込むんだ」なんて言えるわけがない。
言えたとしても、その時点で親子の縁を切っている。

「はぁ。分ったよ。琴美、受話器を貸して」
「むぅ。しょうがないなぁ」

何がしょうがないんだよ。

頬を膨らませ、自分だけ蚊帳の外になっている事に疎外感を感じているのか、不機嫌そうに俺に受話器を渡してくる琴美。
俺は「悪いな」と一言だけ言い、琴美から受け取った受話器を耳に持って行く。

「あー……父さん？」
『よぉ！　京一ぃ、てめぇ……琴美に手を出してんじゃねぇよ！』
「いや、誰もそんな事してないし。琴美だってそんな事言ってなかっただろ？　横に居たんだから分るんだぞ？」
『ちぃっ』

舌打ちしたよ、この父親。

「それでさ。いい加減これからどうすればいいのか話そうぜ。場合によっては俺たちもそっちに行った方がいいだろ？」
「えーーっ！　お兄ちゃんとのラブラブ新婚生活は！？」
「ちょっと黙ってなさい！　それと結婚していないだろ！」
『京一！　貴様ぁ！！』
「アンタもすぐに熱くなるな！　琴美がこんなに残念なのは今に始まった訳じゃないだろ」
『俺の愛娘が残念だと……。俺の愛娘がそうやってお前に愛の言葉を囁くのが……今に始まった事じゃない……だと……！？』

あーもう駄目だ。面倒くさい……。

『とまぁ、冗談はここまでにするか。これからの事なんだが――』
「ああやっと本題か。はいはいこれからどうすればいいんだ？」

半ば投げやりな感じで父さんの言葉を待つ。

『お前達二人には、俺の父さん。つまり爺さんの所に行って生活して貰う！』
「は、はぁぁ！？」
『大丈夫だ！　向こうには既に説明済み！　明日ぐらいには迎えの者が行くはずだ』
「え？　ちょっ、迎えの者？　つか父さん達って駆け落ちしたから繋がりはないんじゃ……？」
『あーあれは冗談だ』
「もうアンタらＢＡ・ＫＡだろ！！！」
『貴様！　親に向かってなんて口の利き方だ！！　それでも元は父さんの玉袋の中に居たヤツの言葉か！？』
「嫌な言い方するな！　一瞬想像しちまったじゃねぇか！！」
普通に考えれば当たり前の事なのに、想像したら全身の毛穴が広がるゾワッとした悪寒が駆け抜ける。
『はぁ。だってな、駆け落ちの方がロマンがあるじゃないか。な？　そう思うだろ？』
「ＢＡ・ＫＡ！！」
俺は勢いで通話を切り、叩きつけるように受話器を戻す。
「お、お兄ちゃん……？」
すると、琴美がトコトコと俺の所まで来て、不安そうに袖をギュッと握ってくる。
「あー……えっとだなー」
琴美のこの表情を直視できない俺。

理由はもちろん。こんなくだらない事なのに、本気で不安になっている琴美が可哀想だからだ。
だってなぁ。こんなにも不安そうにしているのに、「実は駆け落ちは嘘らしいから、明日からは祖父の家でお世話になるぞ」なんて……言えるかよ。

「し、心配するな。明日からは……」

そこで俺は言葉を詰まらせてしまう。

「あ、明日からは――」
「明日からお兄ちゃんの貞操を奪うか、私の純潔が奪われるかの愛のサバイバル性活は終わっちゃうの……？」
「いや、実は父さん達が駆け落ちしたっていうのは嘘らしい。だから明日からそこで世話になる。残念だったな、そんな腐った生活がおじゃんになって。ちなみに生活のイントネーションが違ったけど？」
「だって、わざとだもん♪」

琴美はテヘヘと舌を出して、照れた様な笑みを見せる。
まぁその微笑みには嫌悪の感情しか浮かばないんだが……俺は何も間違っていない。

「なんかそういう事らしいから、今日中に持って行く物の整理に取り掛かるぞ」
「そうだね！　さぁ張り切っていこう！」

グーに握っている手を上に突き出し、元気よく自分の部屋に駆けていく琴美。
その後ろ姿は小さいながらも元気で溢れていて、寂しさを感じてい

る様子は微塵も見えなかった。

第四話：まだまだ続くプロローグ！（後書き）

何だか書いていて小説というより、ゲームのシナリオみたいになっちゃいましたね。
これは癖……なんでしょうか？
最近ちょっとした時間に短編を書いていたりしていると、こんな感じの台詞の回し方ばっかです……。
まぁそれだけ身体が書き方を覚えてきている……という事なんでしょうかね。それだったらまぁ、いいかな？
では、後二話しぐらいで本編に入れればいいなぁ……。
皆さん、読んでくれた人はどんな事でもいいので感想くださいね！
それが、作者の励みになりますから！
では、次話もよろしくお願いします！！

第五話：更に続くプロローグ

「ふぅ。持って行く物はこんな感じでいいかな」

学校で使う道具や制服、私服といった衣服類。
それとゲームや漫画――の中にはもちろんカモフラしている思春期の味方であるゲームや漫画もある。
後はノパソや携帯、通帳や印鑑といった物なんかも持って行った方がいいかもな。
今まで無縁と思っていた祖父の家。
一体どんな家で、どこにあるのか分らない以上、もし、簡単に帰ってこられる距離じゃなかったら大変だ。
少しでも必要と感じた物は持って行く事にする。

「ってあれ？　そもそもそれだけ遠かったら、学校とかどうするんだ？」

琴美だってもう俺と同じ高校に入学が決まっている。
まぁ一緒に電車通学とかになるのかもな。
さすがに車通学なんて楽な事は出来ないだろうし、そんなに甘えてもいけないと思う。
今まで散々好き勝手にやってきたであろうウチの両親。
きっと祖父にだって多大な迷惑を掛けてきたに違いない。

（はぁ。そう思うと、明日爺ちゃんに会うの、少し引けるなぁ）

俺はあの馬鹿両親のせいで、未だ会ったことのない祖父に対して引け目を感じてしまう。

「ちょおおおおっっっと待ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！！！！！！」

勝手に爺ちゃんの顔を想像し、馬鹿共に代わって懺悔するイメトレをしていると、興奮した様子の琴美が俺の部屋のドアを蹴り開け、飛び込んできた。

「お、ハァハァ……お兄ちゃ……ハァハァ……ん！」

顔だけじゃなく、全身から汗を掻いているのか、琴美から湯気という名のスタンドさんが現れる。
嘘だ。こんなの絶対におかしい！
目を覚ませ俺の大脳！　現実を見ろ俺の眼よ！

「た、大変な事に……ハァ、気がついちゃったよぉぉ！！」
「あ、ああ俺も気がついたよ……」

変わり果てた妹の姿に、俺はある結論を導き出した。
ああきっと、俺の管理が甘かったんだ。
もう手遅れかもしれない。
俺はそんな事を心の中で悔やみながら、妹にキッと視線を投げる。

「お前……」

震えてしまう唇をギュッと紡ぐが、すぐに息を大きく吐きだし自分を落ち着ける。
そして、勇気を振り絞って俺はその言葉を発したんだ。

「お前――薬やってる？」

◇◆◇◆◇◆◇

「もう酷いよ！　うぅ……」
「ご、ごめん。でもいきなり息を荒くして、汗だらけのすごい形相で部屋に殴り込んできたらどう思うよ？」
「そんなの……もしお兄ちゃんがそうなって私の部屋に飛び込んできたら……」

いや、そんな事には絶対にならないと思うが……。

「私に発情してくれたんだね！　って歓喜する事間違いなし！」

ああきっとこの妹と俺の次元はズレているんだな。
だから俺の中の基準でこの妹を計ったら駄目なんだきっと。
俺はそんな妹に少しだけ蔑んだ目を向け、それに琴美は「うっ……」と胸を押さえて見せた。

「さ、さすがにその視線には……」

やり過ぎたかな？　と思い、俺はその視線を止めて柔和な笑みを作って見せた。

「興奮しちゃうよね！！」
「……」

もう何も言わないよ。

「う、嘘だよ！　そんな目で見ないで！　私だってお兄ちゃんにそんな目で見られてショックだったからこうやって誤魔化していたんだよ？　それなのに……」

涙目になりながら俺に対して弁解してくる琴美。
何だか部屋の中の空気が重くなっていく。

「悪かったよ。それで、なんであんな状態で俺の部屋に入ってきたんだ？」

一言詫びを入れ、この話題から離れようと本題へ移る。
琴美は顔を俯かせ、答えるのに戸惑いを見せていた。

（そんなに言いづらい事なのかな？）

今まで会った事のない祖父の家で暮らすとなると、年頃の琴美にとっては抵抗があるのかもしれない。
それとも、学校の心配か？
俺なりに琴美の心情を察そうと、必死になって思案する。
けれど、どれも有り触れた理由ばっかで、ここまで思い詰める琴美の表情に合致しそうにない。
そうして俺が思案する中、琴美は意を決したようにその重い口を開いた。

「明日からお爺ちゃんの家って事は……約一年間続いた私とお兄ちゃんの愛の同姓生活が……終わっちゃ――」

そこまで聞いた俺は、琴美を自分の部屋から廊下に叩き出した。

◇◆◇◆◇◆◇

〜〜翌朝〜〜

「あ、お兄ちゃん！　お迎えが来たみたいだよ？」

家にチャイムが鳴り、それに琴美が反応する。

「ああ分ってる〜」

火の元を確認していた俺は、琴美の言葉で玄関へと向かう。
ドアを開けたらお爺ちゃんとお婆ちゃんがいるのかな？
そう思うと、ドアを開けようとする俺の手の平には掻いた事のない汗が浮き出るのを感じた。
それを押さえ込むようにドアノブを握る。

（よ、よし。まずは笑顔だ。初めて会うんだから第一印象は大事だもんな）

俺はそんな決意と、初めて会う親戚に期待を膨らませながら、勝手の慣れたドアを開いた。

「は、はーい。お待たせしまし……た？」

しかし、そんな俺の淡い期待は玄関前に立っている二人のメイドによって砕かれたのであった。

「はじめまして京一様。私は神崎家にて仕えさせて頂いています。

メイド長の本田（ほんだ）　美咲（みさき）と申します」

一人のメガネを掛けた真面目そうな女性、自称メイド長の本田　美咲さんが深々と頭を下げながら挨拶してきた。

それを見て、隣に立っていた綺麗なエメラルド色をした髪のメイドさんも慌てて頭を下げながら自己紹介する。

「わ、私は神崎家にて仕えさせて頂いています。メイドの日下部（くさかべ）陽菜（ひな）と申します」

俺の目の前に、頭を下げながら自己紹介をするメイドが二人。

俺は静かに、そう静かにドアを――閉めた。

「あれ？　お兄ちゃん？　お迎えじゃなかったの？」

「あ、ああ。もしかしたらお兄ちゃん……違うお迎えが来たのかも……」

鍵も一応掛け、ハハハと乾いた笑いを上げながら自分の部屋に向かおうとする俺。

――しかし

「お待ちください、京一様。何故ドアをお閉めになるのです？」

鍵を閉めたはずのドアは何事もなかったように開かれ、メイド長と名乗る女性が話しかけてきた。

「うわ、うわぁ！　メイドさんだ！　生のメイドさんだよお兄ちゃん！」

俺の袖をグイグイ引っ張りながらどこか興奮したように話しかけて

くる琴美。
その俺はというと、そんな余裕はなく、
「お、おい。俺は鍵を閉めはずだぞ？」
「はい。なので強行手段として鍵をピッキングさせて頂きました」
メイド長は「一流のメイドたる者、このぐらい当然です」と何故か慎ましい胸を張りながら平然と言ってのける。
ピッキングが出来る一流のメイドって……ただの空き巣なんかじゃないのか？
「さぁさぁ京一様、琴美お嬢様。お荷物はこちらでよろしいですか？」
もう一人のメイド、陽菜さん……だっけ？
空き巣兼一流のメイド長とは違って、豊満な胸をした彼女はリビングに上がり込み、俺と琴美が用意していた荷物を待機させていた車に勝手に積み始める。
その車というのも、今までテレビなんかでしか見た事がないぐらい黒塗りで長い――リムジンだ。
「この家の鍵は私がしっかりと施錠させて頂きますので、京一様と琴美お嬢様は早く車に乗ってください」
俺の思考が未だ追いついていない中、美咲さんがそう言うと、それを見計らい、陽菜さんが俺の背中をそっと押してくる。
「すっごぉい！　本物のリムジンだ！」
琴美は既にその車に乗るところで、その大きな声で近所の人が次々

と顔を出してきた。

「京一君。一体何したのよ？」

向かいに住んでいる仲がいいおばさんが俺に聞いてくる。

「いやー。俺にもさっぱり――」

「京一様はこれより祖父である神崎　源二様の元で生活なされます。私たちはその神崎家に仕えるメイドでございまして、本日は京一様達のお迎えにまいりました」

俺の言葉を遮るようにテキパキと説明を始める美咲さん。

初めて生で見るメイドさんに向かいのおばさんも「は、はぁ……」と相槌をする事しか出来ずにいる。

「ご近所の皆様に多大なご迷惑を掛けた事は後日改めてお詫びいたしますので。本日はこれにて」

優雅に頭を下げ、俺を促すように背中に手を当ててくる。

「え、えっとそういう事だから、しばらく爺さん？　の所でお世話になってきます。また今度ちゃんと挨拶に来ますので！」

ポカーンとしてしまっているおばさんに、俺は必死で頭の中をフルスロットルしながら言葉を絞り出していく。

「京一様。車をここに長く駐める事は――」

「は、はい。で、ではまた今度！」

おばさんに手を振りながら、陽菜さんによって開けられているドア

から車内に乗り込む。

「では、発車してください」

家の鍵を閉め、俺たちに向かい合うようにして車に乗り込んでくる美咲さんと陽菜さん。

美咲さんの合図によって、そのごつい黒塗りのリムジンは音もなく発車したのだった。

第五話：更に続くプロローグ（後書き）

さてさて、もう少しだけ続きますが……どうでしょう？

自分の好きなジャンル――一般からお金持ちへの移行！

まぁそんな欲望丸出しの今作『一気に逆転する日常物語』。

今回もたくさんの読者様から後書きをいただきました。

では、感謝コーナーです。

龍賀様、Ｗｈｉｔｅ　Ｓｅａｌ様、夜神様、紅　幽鹿様、メガネ様、感想ありがとうございました。

皆様の感想のおかげで作者がどれだけ救われているか。

ほかの方々もなるべくでいいので、感想くださいね！

こうした方が面白いんじゃないかな？　などの意見でもＯＫです！

では、次回の『一気に逆転する日常物語』もよろしくお願いします！！

第六話：もう少しだけ続くプロローグ

「あ、あのーそろそろ説明してもらってもよろしいでしょうか？」

車が走り出してから数分。
その間の車内は、誰も言葉を発することもなく、ただ静かだった。
けれど状況を確認したかった俺は、その沈黙を破ることにする。
俺の問いに、横で車内をキョロキョロしていた琴美も真剣に話を聞く体勢をとっていた。

「そうですね。では説明に入らせて頂きます。京一様は『神崎ブランド』をご存じでしょうか？」

俺の期待していた返答等は違い、逆に質問を返される。

「『神崎ブランド』ってあの？」
「はい。琴美お嬢様のご想像通りで間違いありません」

『神崎ブランド』と言えば、女性を対象とした衣服を発売している世界でも有数なメーカーだ。
男の俺でも知っているくらいだ。
女性である琴美が知らないわけがない。

「知ってはいるさ。あんだけ大きなメーカーだもんな。たしか販売しているのは日本だけじゃないと聞いた覚えがある」
「はい。その通りでございます。そしてそのメーカーの頂点が創設者の神崎　源二様となります」

美咲さんはそこでわざとらしく一区切りして、俺の方をちらっと見てくる。
その意味深な視線と今の説明で、俺の中で合点した。
「なるほど。つまり『神崎ブランド』の創設者、神崎　源二が俺たちの祖父、爺さんなんだな」
「はい。なのでこれから京一様と琴美お嬢様には神崎の屋敷に向かって貰います」
「さぁどうぞ」と備え付けの冷蔵庫から冷えたドリンクをグラスに注ぎ、俺と琴美に渡してくれる美咲さん。
俺はそのグラスに口を付け、一気に傾ける。
（はぁ。何だか偉いことになったな……）
俺の不安は一層増し、それが消える事はなさそうだった。

◇◆◇◆◇◆◇

黒く大きな鉄格子の様な門が自動で開き、警備の人が俺たちが乗っている車に向かって敬礼している。
その異様な光景に俺と琴美は戸惑うが、そんな事はつゆ知らず、車はどんどん奥へと進んでいく。
周りは庭、なのか色々な形に整えられている木々が俺たちを迎えてくれた。
舗装されている道の上は外であるにも関わらずに落ち葉の一枚もなく綺麗だった。
乗ってから気になっていたが、この車、全くと言っていいほど振動

がない。
これは車の性能なのか運転手さんの技量なのか。
舗装された道の上でもそれは変わらなかった。

――そして

屋敷に着いた俺はまず自分の目を疑った。
……ここは本当に日本か？

「ええもちろんです。さぁ、外はお寒いので」

美咲さんがゆっくりとした手つきで立派な戸を開けた。
そこで待っていた光景は――

『お帰りなさいませ。ご主人様、お嬢様』

数十名のメイドさん達が道を作るように、両脇にズラッと並んでいた。
その光景に俺は今日だけで何度目か分らないが呆気にとられる。
琴美なんかは俺の後ろに隠れてしまっていた。

「さぁ上着を――」

陽菜さんが俺の着ていた上着をそっと脱がせ、それを大切な物を扱うように両の手で持つ。

「琴美お嬢様もどうぞ」

美咲さんも琴美に対し、俺と同じような事をしていた。
ここではそれが普通なのか、二人のメイドさんが当たり前のように

行動する。
その光景に俺たち兄妹は慌てふためくが、周りのメイドさんは優しい瞳で温かく見守っていた。

「ん〝っ、ゴホン！　よく来たな京一、琴美！」

そこで一つの野太い声が玄関いうには無駄に広い室内に響き渡った。
本当に無駄に広い分、その嗄れながらも張りのある声は反響する。
そして、その声を聞いた途端、俺たちのことを優しく見守ってくれていたメイドさん達はキリッとした表情に早変わりし、頭を下げたのだった。
それは美咲さんや陽菜さんも例外ではないようだ。
二人も目を閉じながら頭を下げている。

（お、俺たちもそうした方がいいのかな？）

琴美と兄妹特有のアイコンタクトを働かせ、見よう見まねで頭を下げるが――

「ふはははっ！　お前達はそんな事せんでもよい！」

威厳たっぷりのその声の主は、男性用の和服を身に纏っていた。
髪は白いが、上からシャンデリアによって照らされている白髪は銀色に輝いている。
たぶんこの人が俺たちの爺さんで『神崎ブランド』を設立した――神崎　源二なのだろう。
堂々とした感じで俺たちの正面にある長い階段を、ゆっくりと下りてくるその姿はとてつもない存在感だった。
そして俺たちの前に立つ神崎　源二。

「よく来たな、京一、琴美。色々大変だったろ」

そう言うと、俺たち二人を見かけにも寄らないほど優しく抱き寄せる。

そしてポンポンと背中を叩かれる。

俺はその感覚に多少の覚えがあった。

きっとずっと昔、俺がまだ小さい頃に、会った事があるのだろう。

俺は懐かしさに浸る。ちらっと横目で見た琴美も照れくさそうにしていながらも拒絶している様子はない。

琴美も小さい頃、この爺さんに会っていたのだろうか？

少なくとも俺がそれを知らない。

けれど、俺の知らない所で会っていたのかもしれない。

そう考えると、兄妹二人で暮らすよりもここに来て正解だったのかも。

「さて、感動の『再会』は後じゃな。二人の部屋は既に用意してある。まずは身体をゆっくりと休めたらどうだ？　風呂もすぐに入れるようにしてあるぞ。話は昼食の時にでもしよう」

俺たちから離れると、ふははと豪快に笑ってみせる爺さん。

（あ、やっぱり昔に会っていたんだ）

爺さんの言葉に俺は確信を得る。

「美咲、陽菜。京一と琴美を用意してある部屋に案内してやれ」

「「畏まりました」」

爺さんはそう言うと、俺たちにまた後でなと言い残し、階段を上っていく。

「京一様、琴美お嬢様。お部屋はこちらでございます」
俺たちは美咲さんと陽菜さんの案内の元、用意してあるという部屋に向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「なぁ琴美。部屋ってなんなんだろうな……」
「そうだねお兄ちゃん。私たちが今まで使っていたお部屋ってきっと本当のお部屋じゃなかったんだね」

あははと乾いた笑いを二人仲良くする俺たち兄妹。
隣で二人のメイドが「どうなさいました？」と聞いてくるが、正直耳に入らない。
俺たちは『部屋』に案内されたはずだ。
本来部屋とは、個人で使うにしてもベッドや机なんかを置き、更にはテーブルなんかを置くだけでも充分広い部類のはずだ。
それなのに……

「二人で今までの何倍あるんだ？」

部屋の床一面に敷いてある触り心地の良い絨毯の上には天蓋付きのベッド、ＰＣデスクと合体してある使いやすそうな机、４０インチはある液晶テレビに向かい合うようにあるテーブルとソファ。
隅の方には冷蔵庫なんかも置いてあり、もちろん冷暖房なんかも完備。
誰もが夢見た様な部屋がここにはあった。

「また何か必要な物があればお申し付けください」
そう言いながら頭を下げる陽菜さんに、俺と琴美はブンブンと音が鳴るぐらい頭を左右に振る。
これ以上何か必要な物があるのかよと言いたくなるくらいだ。
「それど、先程お二人でと仰いましたが――」
美咲さんはすっと向かいにある部屋を指しながら……
「お一人につき一部屋。つまり琴美様のお部屋は向かい側のお部屋です」
「もちろん。琴美お嬢様のお部屋の設備も、京一様のお部屋と同様ですが、琴美様のご趣味にあった可愛らしいお部屋にしてあります。お気に召しませんでしたら、何なりとお申し付けくださいね」
美咲さんの言葉に続くように、陽菜さんが眩しいほどの笑顔を振りまきながら俺たちに説明したが、その言葉は俺たち兄妹の頭にうまく記憶されなかった事だろう。
それだけ俺たちは呆気に取られていたのだった。

第六話：もう少しだけ続くプロローグ（後書き）

では、感謝コーナーです！

龍賀様、紅　幽鹿様、感想ありがとうございました！

もう少しでプロローグも終わりますので、次話もよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6308z/

一気に逆転する日常物語

2011年12月27日22時47分発行